

報道あれこれ

創刊以来、様々なメディアで取り上げていただいた。世間が「リトルプレス」というものをどう受け入れていったのかも興味深い。
※すべての記事は転載許可をいただいております



▲2015 (平成27年) 2月1日 岩手日報
読書週間特集に掲載。新聞は年齢がばっちり載るので困る。というわけで今に至る。



▶2009 (平成21年) 10月30日
読売新聞
そして島中さんが顔出し登場で「リトルプレスもインターネットと同じく情報を扱っているが、手元に物として残すことができる点が違う」と語る。東京堂書店神田本店では昨年から全国のリトルプレスを集めたコーナーを設けた、とあるように、4年の間にずいぶん増えたものだ。見出しの「おしゃれな小雑誌」という呼び方に、リトルプレスというものをどう表現するかの試行錯誤がにじむ。



◀2013 (平成25年)
4月20日 岩手日報
もりおか啄木・賢治青春館にて開催された「てくり展」の紹介記事。岩手日報さんの呼び名は安定の「ミニコミ誌」。



▲2005 (平成17年) 5月19日 岩手日報
最初のメディア登場記事。テレビにも取材していただいたがどちらも「女性誌」「女性ならではの」という切り口だった。文中「首都圏の洗練されたミニコミ誌を参考に」とあるが、それはきっと大橋歩さんの「Arne」のこと。当事、いわゆる地域雑誌としては、金沢の「そらあるき」、名古屋の「なごやに暮らす」などがあつた。



▶2006 (平成18年) 12月2日
読売新聞岩手版
創刊から1年、なんと「ブーム」になっている(ちなみに文中の平石のミニコミ誌「tan-tan」には、弊社でも創刊から願っているカメラマン・奥山さんが関わっていた)。同年発行の集英社「小説すばる」9号にも「このリトルマガジンが、すごい!」という特集あり。



◀2009 (平成21年)
7月7日 産経新聞
「ここ数年広まった「リトルプレス」と呼ばれる形態」とあり、この呼び方がこの頃には定着。一方、神保町にあった、地方・小出版流通センターの直営店「書肆アクセス」は2007年11月に閉店している。看板娘(?)だった島中理恵子さんが東京堂書店に移っており、この記事にて小出版についてコメント。なんだか感慨深い。



▲2009 (平成21年) 9月16日
岩手日報
初めての別冊「いわてのてごと te no te」発行。雑誌とは違って「本を出版する」という事を意識した年である。余談だが、近年、手ごとがらみで「て」にまつわる様々なネーミングが溢れるようになった。当時、商標などをチェックするため「てのて」「てとて」等を検索してみたが、マッサージ屋さんくらいしか出てこなかったのが思い出される。